

2014年度
国際学研究科 修士論文

アンチエイジングを支える宇都宮都市圏
—長寿・健康・美容のパラダイムを求めて—

Antiaging supported by Utsunomiya City area
—gaining the paradigm of
a better life, health and beauty—

宇都宮大学 大学院国際学研究科
国際社会専攻
学籍番号 134101K
氏名 奥備一彦

要約

利益の最大化と効率の極大化を目指す現代のパラダイムの起源はどこにあるのか。それはイヴァン・イリッチの言う、第二次世界大戦後の「限度をわざとえない『ニーズ』」に由来すると石塚認できる。グローバル化においては尚更に、現代のパラダイムの追求に抱きを掛けた。その戦略は大企業に過去最大の収益をもたらした。これらの実情を日本の経済社会牽引する自動車産業を中心に概観する。一方、地方自治体の税収は激減し、個人は雇用条件の悪化と余儀なくされ、富の偏在と貧富の格差は拡大の一途を辿る。

また、効率の極大化を求める象徴として、リニアモーターの導入と原子力発電の再稼動が挙げられる。その行く末は、人間自らの抉り所である掛け替えのない地球環境を破壊し、その刃が自らに降り懸ることが十分予見されてしまうにも拘らず、ひたすらに現代のパラダイムを追求するという神とも畏れぬ行動に疑問を提す。

代替案はあるのか、否である。せめてもの事として、内発的発展をベースにして都市の実現を提案する。それは、限度をわざとえない「人間本来のニーズ」は何なのかと質問別れ、それと具現化するために地域に存在する資源や文化を活用して産業の創出・育成・発展である。グローバル化にあっても海外や他地域に移転することを選擇しない、既存の産業とは直接競合するものではない。至って流用とグリコロールによって生まれたその地域ならではの産業である。

具体的には、健康・長寿・美容を3要素とするアンチエイジングともたらす産業である。宇都宮に、LRTを基幹とした新交通システムが、2020年の東京オリンピックまでにJR駅の東部地域に、2022年の栃木国体までには西地域を含む全計画が実現される。このインフラをフルに活用して“健康獲得財”的な事業を「もう一つの発展」として立ち上げるのである。LRTとグリコロールで新しい事業、医工連携、1次産業の6次化とフードバー、スポーツと美容に分類して“健康獲得財”的な事例を示す。観光業の波及効果力の中にこれらを組み、積極的に情報を発信して県外そして世界から外資者を呼び寄せる。交流人口を増やして地域経済の底上げを図り、関連企業・産業の収益を増し、雇用を確保し、財政を堅調に保ち、地球環境に優しい地域社会を実現させる。

かくして、持続可能な都市、「アンチエイジング」と支える宇都宮都市圏の登場となる。

目次

(はじめに -----	1.
1. 現代のパラダイムがもたらす負の局面 1.	
2. この状況を生み出したものは何か 2.	
3. 現代のパラダイムに代るものはあるのか 3	
第1章 「まだ、まだ…」 ホモミセラビリスの日本における事例 ----- 4.	
1. 利益の最大化、効率の極大化を求めて、海外立地を選択する企業 —— 国内へ空洞化 4.	
2. グローバル化の厳しい運用 7.	
3. 効率の追求と資金の増殖 10.	
第2章 グローバル化における地方自治体の生き残り戦略 ----- 12.	
1. 企業誘致と地方自治体の苦悩 12.	
2. 「内発的発展」をキーワードにした都市づくりへ 13	
3. 「内発的発展」とは 14.	
第3章 人間本來のニーズは何か——健康を求めて ----- 15	
1. 健康と健康獲得財 15	
2. 健康の価値観 16.	
3. 健康を希求するものは個人だけか 16.	
第4章 内発的発展と文化の流用による健康獲得財の創造 ----- 21.	
1. LRTと既存文化の流用 22.	
2. 医工連携 26.	
3. フードバー —— 6次産業化を中心に 35	
4. スポーツと美容 39	
おわりに ----- 40.	
1. 板木の観光業の力とその活用 40	
2. “グリコロールさせ3装置”として情報発信基地としての コンベンションセンター 41.	

はじめに

1 現代のパラダイムが齎らした負の局面

利益の最大化、効率の極大化を物差しとする現代のパラダイムは、世界経済の拡大寄与してきたが一方では、先進国に限らず新興国、発展途上国においておいても、一部の企業、一部の人々のみ富を集中させ、多くの人々の幸せには結びついていない。貧富の格差を拡大させ、それどころか地球温暖化による環境破壊も齎らしている。

地球の生態系を維持するために、18世紀の産業革命前に比べて、今世紀末の気温上昇を2度以内に抑えるというのが各国で合意されている目標である¹。しかし至難である。

国際連合の気候変動に関する政府間パネル（IPCC²）は、加盟195ヶ国とのチェックを受けて承認された第5次報告書（2013年9月）で「①温暖化の原因は、人為起源の温室効果ガスである可能性の確率が95パーセント以上と極めて高い。②世界の平均気温は1880年から2012年までに0.85度上昇し、このままだと今世紀末、最大4.8度上昇する。③海面水位は1901年から2010年までに19センチ上昇した。このままだと今世紀末、最大82センチ上昇する。④主たる温室効果ガスである二酸化炭素(CO₂)の大気中の濃度は1970年以来40%増加した。これは過去80万年で前例のない高さである³」と警告している。

海面水位の上昇はどのような影響を齎すのか。前回のIPCC報告書（2007年）で示された「59センチの上昇」にもとづいて、文部科学省が石打発してある「①世界の国土面積の0.79から0.80パーセントが水没する。②例えばインドネシアは国土の10.33を（レ10.43）パーセントが水没する」と予測している。環境省など3省庁の報告（2013年3月）では「海面水位が60センチ上昇すると東京湾、伊勢湾、大阪湾においてゼロメートル地帯の面積とそこに住んでいる人口は1.5倍になる」と報じた。

2013年の夏、気象庁の927観測点の内143観測点で「過去最高気温」が、それ93地点で「最も高い最低気温」が観測された。海面水温も極端に高く、日本周辺の10海域の内5海域で過去最高を記録した。北海道でマグロが取れたり、沖縄でサンゴが死滅したりといった異変も起きた。突発的なケリラ豪雨や雷、竜巻が頻発し多大な被害を齎した。宇都宮気象台によると「栃木県内で、1991年以来に確認された竜巻は計7件、うち6件は2010年以来発生したものである。全国でも近年に竜巻の確認数は増えている」という。

(注) 1. 朝日新聞 2013年9月8日、「成否の鍵、米中握る」

2. 「現代用語の基礎知識」2013年版 Intergovernmental Panel on Climate Change の略。国連環境計画と世界気象機関が共催し、各國政府が参加する会。

3. 朝日新聞 2013年9月28日「温暖化の原因は人『極めて高い』指摘」

4. 朝日新聞 2013年9月28日「気温上昇2度以内『困難』」

5. (左) 4に同じ

6. 朝日新聞 2013年9月8日、「温暖化、暴れる天気」

7. 下野新聞 2013年10月4日「竜巻発生の危機回避」

そして遂に、IPCCは「今世紀末に4.8度上昇すると生物種の大絶滅のほか、農産物の減産による世界的な食料不足や、将来的に大幅な海面上昇を引き起す極地の氷床消失など深刻かつ不可逆的な影響が高まる。それは、内戦など暴力的衝突を加速させ国家の安全保障にも影響を及ぼす」と強く警告を発している。

2. この状況を生み出しているのは何か

果しなき努力の成績であり、大多数の人々が称える現代の文明・文化は、真に、人類に永遠の幸せを齎すのか。今こそ立ち止まるべきである。人は、掛け替わる、地球の一構成物にすぎない。この構成物が造りあげた現代の文明・文化が「自らの拠り所である」地球を傷め、自らの前途を絶うとしている。そして現代のパラダイムを賞賛する、この構成物は、今世紀末には100億人にもなると予測されている。

ネズミは異常に繁殖力の結果、種の存続が危うくなると千尋の谷底めがけて、集団自殺すると聞くが、人類は種の存続どうか、絶滅の危機を自らがせせとつくっているのではないか。利益の最大化、効率の極大化を目指す留することを知らないニーズとは一体何物なのか。

イヴァン・イリッチは、「第二次世界大戦を境に、人間はコモンマン（常人）からニーティマン（ニース人間に）に変った」とレニーズとニスのようない説明をしています。

--- 第二次大戦までの生活の条件は、決して越えてはならない限界をわざと多くことにあった。生活は不变の「必要」の領域にあった。--- 人は必要という本来の意味におけるニーズに耐えなければならなかった。--- 文化とは、ある場所における、ある特定の時代の人びとのニーズを受入れることで形成される社会形態（ゲニタルト）であり、それそれが独自な生活儀式の歴史的表現であった。そして生活は「必要」に耐える技術の範囲で営まれていた。--- 欲望と満足することはできないという確信もまた、自明なものであった。---

--- 第二次大戦後の発展論に現われた「ニーズ」は、必要でも欲望でもない。発展とは約束であり、新しい技術、政治の力を利用して「必要」の支配と打ち破るために持ち出された担保の言葉である。--- 希望は欲望を育てる必要から生まれ、予測し得ないもの思ひかけないものを目指す。人間であれ神であれ人格を持つ他者の恣意とヨリビトにしている。期待は発展の約束に育てられてニーズから生まれ、主張や要求へと向かう「まだ」と語っている。人間という現象は、必要のなかで耐える技術によつて定義される存在ではなくなり、今や欠乏を測る物差しとして理解される。この欠乏が「ニーズ」である。---

--- 人々、ニーズの存在を否定するには不可能に近い。--- 欲望と破壊が融合し、ニーズの存在が実感される。こうしてニーズはホモ・ミセラビリストの正常な条件となる。

「まだ、まだ、まだ…」と到達しない欠乏イコール「ニーズ」に飲まえた人間の増殖こそが、利益の最大化、効率の極大化を求める現代のパラダイムであり、現在深刻な社会状況を生み出している原因である。

3. 現代のパラダイムに代るものはあるのか

1917年10月のロシア革命によって成立した世界最初の社会主义国ソビエト連邦は、第二次大戦後世界の霸権を競い、資本主義国の代表であるアメリカ合衆国との間で冷戦状態になってしまった。

(注) 8. 朝日新聞 2014年4月1日「温暖化で食料危機、警告—生き物、大量絶滅—」

9. イヴァン・イリッチ「ニーズ Needs」 グォルカング・ザックス編『脱「開發」の時代』 PP129~145
1996年9月5日 昌文社

結果は米国が勝ち、ソ連は1991年12月、崩壊した。ソ連邦と構成していた国々はすべて、資本主義社会のシステムに組込まれた。

両者の違いは、「生産手段と国家が所有するか 私人が持つか」「生み出された富は国家が配分するか 自由市場に任せるか」という点だけであり、どちらも利益の最大化、効率の極大化を目指すことには変わりがない。ということは、米ソどちらが霸者になっていても、現代のパラダイムに変化を齎すことにはならなかつてよいのである。

現代のパラダイムの変更は、全く新たなそして現在とは異なる価値感と尊く思想とそれに合意する社会の実現を意味するが、それは何か筆者には全く見当もつかない。

そこで人類の滅亡を少しでも先送りさせて、その間に新しいパラダイムを創造し構築するまでの時間を作り出すために、もう一つの拠点を提案したい。キコンセプトは二つあり、その一つは、大田好信の「日本という国家の外に脱出せずに、なんとか自己のアイデンティティを主張する流用の戦略」である。流用の戦略とは「押しつけられたシステムをある一定のやり方で利用し、新しい文化を創造する生き方である」。彼はこれを「文化の流用」¹⁰とい。もう一つは、鶴見和子が1976年、世界に翻訳して発表した「内発的発展」¹¹である。鶴見は「内発的発展」を次のよう�述べている。

内発的発展とは、目標に沿って人類共通であり、目標達成への経路と、その目標を実現するであろう社会のモデルについては、多様性に富む社会変化の過程である。共通目標とは、衣・食・住・医療の基本的必要を充足し、それまでの個人の人間としての可能性を十分に発現できる条件を創り出すことである。これまでの経路と目標を実現する社会の並び、人々の暮らしの儀式とは、…固有の自然生態系に適合し、文化遺産（伝統）に基づいて、外来の知識・技術・制度などを照合しつつ、自律的に創出する。…衣・食・住・医療の基本的必要を充足し、は、イクシノイリッヂの指摘する「限度を引きまた本来の意味における必要」に重なり、「…外来の知識・技術・制度などを照合することは、正に大田好信の「文化の流用」と同義である。

本論文では、宇都宮都市圏に存在する文化（これから導入されるLRT=新交通システムを含む）、資源、自然、や地理等を組合せ（グリコロール）あるいは流用して、各々が互いに必要不可欠な関係となり、シナジー効果も生み出す仕組みを模索し、提案する。それは本来の意味における必要を超えるものではなく、決して現代のパラダイムを追いかけるものでもない。

第1章で 現代のパラダイムがもたらした、グローバル化における負の局面を概観し

第2章では、現代のパラダイムに翻弄される地方自治体の児童と、その対策としての「内発的発展」を提示する。

第3章で 人間本来のニーズは何かと問い合わせ、その一つが「健康」であることを確認する。

第4章では、宇都宮都市圏固有の資源を用いて生み出される「健康獲得財」に注目し、それが内発的発展の条件を満足しているか否かをチェックする。

最後に、アシエイシングをアマルティア・センの「福祉と潜在能力による捉える考え方」と照合しながら論じ、「アシエイシングと支える宇都宮都市圏」の意義を示す。

(注) 10. 大田好信『トランスポーテーションの思想—文化人類学の再想像—』 P53. 1998年5月10日
世界思想社

11. 鶴見和子「内発的発展論の系譜」 鶴見和子 川田侃 編『内発的発展論』 P.49.
1989年3月10日 東京大学出版会